

# 外国語教育とオンラインの交流による言語・文化習得の試み

- Promoting Cultural Literacy & Advanced level Language Proficiency through the Internet-mediated Communication between American & Japanese Students -

デューク大学アジア中東学科日本語プログラム

黒川直子

Email: kurokawa@duke.edu

◎Key Words 外国語教育 目標文化・言語 外国語教師育成

## 1. はじめに

アメリカで外国語の習熟度を測る指針として普及しているACTFLのOral Proficiency Guidelineによると「非母語話者の発話に慣れていない母語話者に意味を伝えられる」ことは上級話者の条件の一つとなっており、特に中級から上級への移行期における外国語学習では教師以外の母語話者と主体的にコミュニケーションをする機会を増やしていくことが肝要とされる。一方で地域に母語話者が少ない、母語話者のコミュニティーとの接点がない等の理由で習った言語を教室外で使用する機会がなかなか得られない学習者も多いだろう。筆者の在籍するアメリカの大学でも日本人の留学生は少なく、日本語学習者が同世代の日本語母語話者と接する機会は限られている。

また日本においても海外に留学する学生数の減少が伝えられる中、英語を学びながらも異文化コミュニケーションの機会が十分に得られない学生も多いと思われる。しかし小学校の英語教育も必修化され国際理解教育が推進される現在、特に将来英語教師を志す学生達が外国人とのコミュニケーションの中で自文化を伝え、異文化を読み解く能力を養う機会を得ることは必要不可欠と言えるだろう。

本稿ではこのようなアメリカと日本の二つのグループの学生達をオンラインによってつなげた交流プロジェクトを報告する。オンラインによる外国語の学習者間の交流については様々な研究や実践報告があり、Thorne(2010)はその意義として学習者による主体的な意味交渉、特に語用論の面における言語発達や自文化への気づきの機会であることなどを挙げている。本稿では英語教育専攻の日本人学生が母語を使用しアメリカの日本語学習者を支援するという形で行われた交流の試みについて紹介し、その意義をアメリカ人日本語学習者、日本人学生双方の観点より考察する。

## 2. プロジェクト概要

この試みは2011年の秋学期よりアメリカのノースカロライナ州にあるデューク大学の上級日本語コース(履修者12名)の課題の一部として、大阪の国立大学の英語教育課程に在籍する大学院生3名と学部生10名の協力を得て行われた。以下、日本人学生が参加した三つの活動について概略を説明する。

### 2-1. ブログ

ブログツールのWordPressを使用してクラスサイ

トを開設し、コメントを交換する活動を行った。まず互いを知り合うために日本人学生を交えた参加者全員が写真と共に自己紹介のメッセージをアップロードし、その後日本語学習者が教科書のテーマに沿って書いた作文に対しブログ上で意見や感想を交換する活動が学期を通して5回行われた。

### 2-2. メール交換

上記のブログと並行して、日本語学習者と日本人学生との一対一のメール交換が行われた。ブログが与えられたテーマに従って行われたのに対し、この活動では同世代の学生同士が興味のあることについて情報交換を楽しむことを目的とし、それぞれ自国の文化の説明や日々の生活の中で起こったことや感じたことなどについて4回に亘り自由なやり取りが行われた。

### 2-3. 動画の作成・視聴

日本の大学院生がコースで使われている日本語教科書『上級へのとびら』の各課のテーマに基づいて意見交換を行った映像などを撮影し、3-5分程度に編集した動画を作成した。その後アメリカ側で教師が動画の聞き取りや内容に関する教材を作成し、学習者は各自オンラインにて動画を視聴し課題を行った。動画のテーマは日本の宗教、教育からポップカルチャーまで多岐に亘り、一学期を通じ5課分の教材が作成された。

## 3. 活動の評価

### 3-1. アメリカの日本語学習者の反応

学期終了後にコース履修者に対して行われたアンケートによると、日本の学生との交流を取り入れた活動についてブログは90%、メール交換は80%、動画は70%の学生が「とてもよかった」「よかった」の肯定的な評価をした。その理由として「同世代の日本人と大事なテーマについて話し合う機会が持てた」「教科書とは違う生の日本語に触れることができた」などが挙げられた。動画については「非常に面白かった」「地域の文化や方言(関西弁)に触れることができてよかった」などの肯定的な感想が多く見られた。また自然であるがゆえに「聞き取りが難しかった」という意見も複数あり学生の到達度によりその評価は分かれたが、一般的に交流活動は前向きに受け止められていた。

### 3-2. 日本人学生の反応

本プロジェクトに参加した大学院生3名、学部生7名に指導教授を加えた11名より回収したアンケート

の結果、100%が英語教育を学ぶ日本人にとって日本語学習者との交流は意義があると考えていることが分かった。活動に参加した感想として「自国の文化について話したり自分の知らなかった世界について知ることができた」「価値観が違う人と交流するのは有意義」など国際理解の面での利点が多く挙げられた。

英語教育を勉強する上でどのような点が有益であったかという質問には「非母語話者と接するのは自分達の英語が母語話者にどうとらえられるか知る上で有益」「外国語を教える上で母語をきちんと習得していることも大切だと感じる機会になった」など、立場を変えて母語で非母語話者とのコミュニケーションを行う利点が挙げられた。また、相手に物事を効果的に伝える方法を学ぶことにより教育力向上につながるという声もあった。

その他に複数の学生からデューク大学の日本語学習者のレベルの高さ、日本社会や文化に対する知識の深さや日本的な感覚への理解、学んだ言語を駆使して深い意見を伝えようとする積極的な姿勢に感激したという感想があり「同じ外国語を学ぶ立場にあって言語習得のためにどのような取り組みをしているか意見交換できてよかった」との感想もあった。更に「日本語教育における指導法や活動を垣間見ることにより英語教育へのヒントを得ることができた」との感想もあり、教授法の上での学習効果も挙げられた。

#### 4. 考察 & 今後の課題

今回の試みにより、日本文化に興味を持ち日本語能力の向上を願うアメリカの日本語学習者と、国際理解の視点や国際対話能力が必要とされる英語教員志望の日本人学生は互いに貢献し、吸収し合えるものがあることが分かった。アメリカでは1983年に外国語学習ナショナル・スタンダードが教育基準として提唱されて以来言語と文化を融合させた授業が広く実践されているが、このような交流活動もスタンダードの5C (Communication, Cultures, Connections, Comparisons, Communities) を満たしたものの一つだと言えるだろう。もちろんこの短期間の交流で達成できることは限られているが、自国で外国語を学ぶ学習者にとってこのような母語話者との触れ合いは目標文化をより深く理解するためのスタート地点ともなるものであろう。森山 (2010) が論じる通り学習者の人間同士の接触は「知識・所産としての文化」を超えた「個の文化」の理解への入り口となるものであり、生の交流を通して「コミュニケーションに介在する文化」を学ぶ機会にもなるものと思われる。今回紹介した試みは学習者間の交流の一例であるが、コースの目的に応じて適当なツールを使用し、様々な形の活動に発展させることが可能だろう。

最後に今後このような活動をカリキュラムに取り入れる上で考慮すべき点を挙げておきたい。まずはスケジュール面の調整が一つの課題であろう。交流には様々な意義があるものの四技能の向上のためには従来型の指導や課題も不可欠であるため、結果的に課題を

増やすこととなりスケジュール編成は少々過密なものとなった。そのような中で日本側に協力をお願いすることとなり、時間的な余裕のなさから時にアメリカ側の締め切りのタイミングと合わない場合などもあったが、互いに連絡を密にすることで対応していきたい。

また前述の通り一部の学生にとっては生教材の聞き取りが難しかったとの声もあった。Mori(2007)が指摘する通り母語話者の自然な発話は必ずしも文法的ではなくその聞き取りは中級学習者にとっては超えなければならない壁ではあるが、生の言語に触れる機会は社会言語学的な観察においても有益であり、語彙やスピードをどの程度調整して学習者のレベルに合った教材を作っていくかは今後の課題としたい。

また今回は日本語の授業の一環として日本人学生には母語使用での協力をお願いしたが一部英語力を試す機会もほしいとの要望もあった。今後は課外活動を含め、日米双方の学生にとってより魅力ある学習の機会が提供できればと思っている。

#### 5. おわりに

以上、オンライン上の日米学生の交流の試みについて報告した。日本語教育と英語教育は互いに貢献し発展できることが多い分野であり、物理的な距離がテクノロジーによって解消された21世紀はこのような交流がますます盛んになっていくことが期待される。今回快く協力に応じてくれた日本の学生達に感謝すると共に、当地での日本語教育の実践や試みが将来の日本の英語教育を担う学生達の一助となることを願ってやまない。

#### 謝辞

本プロジェクトは吉田晴世教授と下記の大学院生達の尽力なしには成立し得なかったものであり、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

秋永真由子、篠崎文哉、鈴木翔大 (50音順、敬称略)

#### 参考文献

- (1) 岡まゆみ他：“コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語：上級へのとびら”くろしお出版 (2009).
- (2) 外国語学習ナショナル・スタンダードプロジェクト：“21世紀の外国語学習スタンダード”国際交流基金日本語国際センター(1999).
- (3) 森山新：“グローバル時代に求められる総合的日本語教育”，比較日本学教育研究センター研究年報 6: pp. 163-169 (2010).
- (4) Mori, Junko：“Learning Through Listening Towards Advanced Proficiency”，pp.1—9, Center for Advanced Language Proficiency Education and Research Position paper (2007)
- (5) Thorne, Steven：“The “Intercultural Turn” and Language Learning in the Crucible of New Media”，Language, Literacies and Intercultural Learning in the 21<sup>st</sup> Century (2010).